

世界の鉄鋼市場

塩田長英 新評論



- 第1章——世界の鉄鋼業
- 第2章——日本の鉄鋼市場
- 第3章——アメリカの鉄鋼市場
- 第4章——ヨーロッパの鉄鋼市場
- 第5章——カナダとオーストラリアの鉄鋼市場
- 第6章——後進国の鉄鋼市場
- 第7章——社会主義国の鉄鋼市場
- 第8章——世界の鉄鋼市場における諸問題

世界の鉄鋼市場

塩田長英

新評論

著者紹介

しお だ なが ひで
塩田 長英

1937年 東京に生まれる
1961年 東京大学法学部卒業
現在 (財)日本総合研究所勤務
著書 『日本の商社』(至誠堂, 1966)
『日本の鉄鋼市場』(至誠堂, 1969)
共著 『70年代の日本中小企業』(新評論, 1972)
論文 「大企業経営の論理」(1971)
「総合商社は多国籍企業となれるか」(1972)
「金属の流通を見直す」(1972)
「投機企業化する商社の未来」(1973)
「上尾市民はなぜ石を投げたか」(1973)
現住所 埼玉県上尾市西上尾第一団地2-17-107

世界の鉄鋼市場

(検印廃止)

1973年7月31日 初版第1刷発行

定価 1000円

著者 塩田 長英

発行者 美作 太郎

発行所 株式会社 新評論

郵便番号 160

東京都新宿区戸塚2-1053

電話 東京(202) 7391 番

振替 東京 113487 番

© 塩田長英 1973年

印刷所 白陽舎印刷工業(80)

製本所 鬼原製本所

落丁本・乱丁本はお取替えます

1060-600007-3177

は し が き

本書は、産業の中でじわじわとその地位が低下している鉄鋼業の国際市場についての概説書である。世界の鉄鋼業については、その生産活動を中心に分析した書物は数多いが、市場の構造、貿易などについて分析した書物は決して多くない。生産財の流通に関心をもつ筆者としては、かねてから鉄鋼の国際市場を自分なりに分析しようと思ひ準備は続けていた。

本書は『週刊金屬』誌に一九七〇年五月から七二年九月まで連載した「世界の鉄鋼市場」を加筆訂正したものである。

また本書は一九六九年二月に出版した『日本の鉄鋼市場』（至誠堂）の続編でもある。筆者が鉄鋼市場についての概説書を書こうと思ひ立ったのが一九六六年であり、足かけ八年でどうか、日本と日本をとりまく国際市場の両面について、はなはだ不満足ではあるが概説することができたといえる。本書も、また前者と同じく鉄鋼市場に関する入門書、あるいは鉄鋼業に関心を抱かれる人々にとっての教科書的なもので、いわゆる学問的な理論構築を試みたものとはいえない。だが、鉄鋼市場に興味をもたれる方が、さらに深くこの問題を知ろうとする時の助けとなるよう、配慮して書いたつもりである。

資料のうち統計に関するものは、主として鉄鋼統計委員会が毎年発表する『鉄鋼統計要覧』（略して「要覧」とした）、日本鉄鋼輸出組合の発行する『旬報』掲載のものを活用させていただいた。鉄鋼業

界は他の産業とくらべて統計が整備しており、わが国でも日本鉄鋼連盟と日本鉄鋼輸出組合が、統計の整備に力を注いでおり、本書をかく場合もこれらの統計にはほとんど依存した。学問書ならば本来海外統計については原統計にさかのぼって引用するのが本当であろうが、本書は概説書でもあり、また上記二団体の統計は信憑性もきわめて高いのでそのまま活用させていただいた。またそのことによって筆者はかなりの労力をはぶかしていただき深謝している。

本書の中で、引用をとくに記さなかった統計は鉄鋼統計委員会『鉄鋼統計要覧』からの引用である。統計は原則として歴年統計とした。わが国では年度統計（四月～三月）が多いが、国際的には歴年統計の方がずっと比較しやすいためである。また数量の単位も原則としてメートル法にしてある。

また用語として「鉄鋼」「粗鋼」「鋼材」といった使い方をしているが、決して厳密な意味に則した使い方ではない。もちろんある程度は分けて使用しているが、それぞれ便宜的な区分にした場合もある。

本書をかくにあたっても、またまた多くの方々のお世話になった。とくにここで深謝しておきたいのは上原正毅氏である。上原氏は筆者が住友商事に在職中の同僚であり、筆者とともに鉄鋼統計をいじりまわした仲である。最近氏が不遇のうちに住友商事を退社せざるをえなくなったことはまことに残念である。

『週刊金属』に連載中は同誌の鴨井氏や佐久間氏にも大変お世話になった。

最後に本書の出版については新評論の二瓶一郎氏に多くのご迷惑をおかけした。本年一月に脱稿すべきものが、六月になってしまった。筆者は商社問題にも強い関心があったため、折からの商社の投機間

題で多忙となり、本書を期限までにまとめることができなかった。

一九七三年六月

塩田 長英

はしがき

目次

はしがき 一

第1章 世界の鉄鋼業 九

一 世界の鉄鋼生産 九

二 世界の鉄鋼貿易 一六

三 世界の鉄鋼資本 三

第2章 日本の鉄鋼市場 七

一 日本の鉄鋼生産 七

二 日本の鉄鋼需要 三

三 日本の鉄鋼貿易 三

1 わが国の鉄鋼輸出入 (三六) 2 向け先別にみた鉄鋼輸出 (四〇)

3 商品別にみた鉄鋼輸出 (四三) 4 わが国の輸出環境 (四五)

四 日本鉄鋼業の海外進出 四七

第3章 アメリカの鉄鋼市場 五

一	アメリカの鉄鋼業……………	五
1	アメリカの鉄鋼生産(五)	
2	アメリカの鉄鋼価格(五)	
3	アメリカ鉄鋼業と公害(六)	
二	アメリカの鉄鋼輸出……………	三
三	アメリカの鉄鋼市場……………	六
1	アメリカの鋼材国内出荷(六)	
2	アメリカの鉄鋼輸入(七)	
3	アメリカの鉄鋼流通(八)	
四	アメリカの鉄鋼輸入制限……………	八
第4章	ヨーロッパの鉄鋼市場……………	九
一	ヨーロッパの鉄鋼業……………	九
1	ヨーロッパの鉄鋼生産(九)	
2	ヨーロッパの鉄鋼資本(九)	
二	ヨーロッパの鉄鋼貿易……………	九
三	ヨーロッパの鉄鋼需要……………	一〇
第5章	カナダとオーストラリアの市場……………	二
一	資源と鉄鋼生産……………	二
1	鉄鉱石と原料炭の輸出(二)	
2	鉄鋼生産と鉄鋼資本(二)	

二	鉄鋼貿易と国内需要……………	一三〇
1	最近の鉄鋼貿易（二三〇）	
2	国内の鉄鋼需要（二三三）	
第6章	後進国の鉄鋼市場……………	一三七
一	後進国の鉄鋼市場の共通性……………	一三七
二	東南アジアの鉄鋼市場……………	一三三
1	東南アジアの概観（二三三）	
2	インドの鉄鋼市場（二三五）	
3	その他の市場と日本の進出（二三六）	
三	中近東の鉄鋼市場……………	一四三
四	アフリカの鉄鋼市場……………	一四九
五	中南米の鉄鋼市場……………	一五三
1	中南米の鉄鋼生産と日本の進出（一五三）	
2	中南米の鉄鋼需要と貿易（一五七）	
第7章	社会主義国の鉄鋼市場……………	一六一
一	社会主義国内の鉄鋼需給……………	一六一
二	中国の鉄鋼市場……………	一六六
1	中国の鉄鋼生産と需要（一六六）	
2	日本の中国向け鉄鋼輸出（一七〇）	
三	ソ連の鉄鋼市場……………	一七五

1	ソ連の鉄鋼生産と国内需要（二七五）	2	ソ連の鉄鋼貿易（二七九）
四	東ヨーロッパなどの鉄鋼市場……………		二八三

1	東ヨーロッパの鉄鋼市場（二八三）	2	その他の国々の鉄鋼市場（二八七）
---	------------------	---	------------------

第8章	世界の鉄鋼業の直面する諸問題……………	二八九
-----	---------------------	-----

一	巨大鉄鋼資本と競争制限……………	二八九
二	鉄鋼需要と資源のバランス……………	二九六
三	後進国の鉄鋼業のゆくえ……………	二〇〇
四	社会主義国の生産力の拡大……………	二〇三
五	日本の鉄鋼業の未来……………	二〇五

第1章 世界の鉄鋼業

一 世界の鉄鋼生産

世界の鉄鋼生産は一九七二年にいたってついに六億トンを超えた。鉄鋼生産が産業といえる規模で拡大してきたのは産業革命以後でこの二〇〇年余といえるが、実際に急速な成長を示したのは一九世紀後半の製鋼法確立によってである。しかも現在のような大規模な生産が各国に定着したのは、アメリカを除いてはすべて二〇世紀にはいつてからのことである。

今日の世界の鉄鋼生産の概略にまず目を向けてみよう。第1-1表は、第二次世界大戦終結後五年を経過した一九五〇年から以後の世界の鉄鋼生産量を示したものである。世界の鉄鋼生産は一九五一年には二億トンを、五九年には三億トンを、六四年には四億トンを、六八年には五億トンをこえた。その増加の速度は少しずつ早まっており、一九五〇年代では年産は一・六倍増を示したが、六〇年代は一・七倍となった。一九五五年以後の世界経済にも、数度の景気変動があったが、その間世界の粗鋼生産はほとんど落ちこむことがなかった。わずかに一九五四年、五八年、七一年の三回のみ生産の減退を経験したにすぎない。一九五四年といえは、朝鮮戦争が終って平和がよみがえり、アメリカの鉄鋼生産が急減

第1-1表 世界の粗鋼生産の推移

1950	189,300	1962	361,100
51	210,700	63	388,100
52	211,400	64	439,700
53	234,300	65	461,200
54	223,600	66	479,200
55	270,400	67	495,100
56	284,000	68	528,400
57	293,700	69	575,000
58	274,600	70	597,000
59	308,400	71	583,000
60	341,200	72	629,400
61	355,200		

(資料) 要覧、その他

(注) ①単位:1,000トン ②1972年は速報

である。この三回をのぞけば、世界の鉄鋼生産は増加する一方で、第1-1表に示した二三年間で実に八七億トン余という膨大なものとなった。また七二年の生産は五〇年の三・三倍の規模となったのである。

わが国では、いわゆる経済の高度成長が続き、一九六〇年に発表された所得倍増計画では一九七〇年の粗鋼生産が四、八〇〇万トンと想定されたのであるが、現実には、一九六七年にその目標を大幅に超え、一九七〇年には九、三三〇万トンと、目標の倍増の増加を示した。

アメリカの鉄鋼専門誌として有名な『アイアン・エイジ』は、一九七〇年に「世界の鉄鋼生産は順調に伸びて、一九七〇年代の末には一〇億トンに達するだろう」といった。一九六〇年の三・四億トンは七〇年に六億トン弱に増加し、アメリカは伸び悩んでいるものの、日本、ソ連、ヨーロッパの各国の生産は増加しているから、七〇年代末には倍増とまではいかなくとも、一〇億トンに近づくことは十分予

した年であるし、五八年はアメリカ経済が不況にみまわれ、ふたたび生産が激しく低下した年である。七一年は人々の記憶も新しい大規模な国際通貨危機が資本主義経済全体をゆさぶった年である。アメリカ経済、ドルの弱体化がヨーロッパや日本の経済、通貨をゆさぶり、第二次大戦後ずっと続いてきたIMF体制も大幅な変革を余儀なくされた。国際通貨危機は世界経済の停滞をしい、この年は資本主義諸国の鉄鋼生産がのきなみ減少したの

第1章 世界の鉄鋼業

第1-2表 世界の粗鋼生産における
主要国

				1971	1972
ソ			連	120,637	125,500
ア	メ	リ	カ	111,780	123,350
日			本	88,557	96,917
西	ド	イ	ツ	40,313	43,703
イ	ギ	リ	ス	24,175	25,345
フ	ラ	ン	ス	22,843	24,054
中			国	21,000	23,000
イ	タ	リ	ー	17,452	19,784
ベ	ル	ギ	ー	12,445	14,530
ポ	ー	ラ	ン	12,450	13,500
チェ	コス	ロ	ヴァ	12,069	12,600
カ		ナ	ダ	11,040	11,720
ス	ペ	イ	ン	7,720	9,380
ル	ー	マ	ニ	6,750	7,400
オ	ース	ト	ラ	6,817	6,890
イ		ン	ド	6,060	6,550
ブ	ラ	ジ	ル	6,020	6,520
東	ド	イ	ツ	5,745	6,100
オ	ラ	ン	ダ	5,083	5,580
ルク	セン	ブル	グ	5,241	5,457
そ	の	他		38,803	41,520
合		計		583,000	629,400

(資料) 旬報, No.705 (1973-1'下旬)

(注) ①単位:1,000トン ②1972年は速報

想されよう。

現在世界の国数は百数十を数える。国連に加盟している国の数をみても一三〇余国(中国の国連加盟時で一三一ヶ国)あるのだが、世界の鉄鋼生産の大半は国際鉄鋼協会(IISI)加入の二四ヶ国といくつかの社会主義国によって占められている。第1-2表は、そのうちでも主要鉄鋼生産国といえる二〇ヶ国の生産量を示したものである。これまでもっとも生産量の大きいのはアメリカで一九世紀の末から最大の生産量を誇ってきたのだが、一九七一年にいたってソ連の生産量がアメリカを上まわり、世界の鉄鋼生産も新しい時代を迎えたといえる。

現在では、ソ連、アメリカ、EC(六ヶ国)⁽¹⁾そして日本の四大国・ブロックが世界の鉄鋼生産の大半

を占めている。一九七二年にはソ連が一二五、五〇〇千トンで一九・九%、アメリカは一三三、三五〇千トンで一九・四%、ECは一三三、一〇八千トンで一八・〇%、日本が九六、九一七千トンで一五・二%を占め、この四大国・ブロックで合計四五八、八七五千トンで七二・五%に達し、

全世界の四分の三近い量となる。この四大国の中でも、ソ連と日本はそれぞれの経済体制を代表するかのごとくその鉄鋼生産を拡大し、アメリカとヨーロッパが中心であった鉄鋼生産体制を全く変貌せしめたといつてよい。

主要国の鉄鋼生産を規模別にみると一億トンをこえる国はソ連とアメリカの二ヶ国だが、日本もいまの生産状況では一九七三年には一億トンをこえるかも知れない。

次に、一、〇〇〇万トンをこえる国は日本からカナダまで九ヶ国、五〇〇万トンをこえるのはスペインからスウェーデンまで一〇ヶ国あり、南アフリカもここにはいる。

後進地域でも東南アジアでは韓国、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、中南米ではアルゼンチン、メキシコ、ヴェネズエラなどが鉄鋼生産に力を注いでいるが、その生産量はいまだ世界全体からみれば微々たるものである。第1・2表の合計は各種統計資料から判明できるすべての粗鋼生産国約六〇ヶ国を合計したものとされるから、主要二〇ヶ国をのぞく残りの四〇ヶ国でやっと西ドイツ一国に匹敵する四、一五〇万トンしか生産しておらずそのシェアも六・六%と一割に満たない。上位二〇ヶ国は一国平均二、九〇〇万トンだが、下位四〇ヶ国は一国平均一〇〇万トンである。わが国では「鉄は国家なり」とか「鉄は産業の米である」などといわれており、わが国に限らずどの国でも鉄なしでは経済が成り立たないのだが、世界の八〇%以上の国々では、いまだに鉄鋼生産がほとんど行なわれていないのである。鉄鋼を粗鋼としてとらえると上述のとおりだが、鉄鉱石を溶かして新しく鉄として生産されてくる銑鉄の面をみると、その生産はさらに限られた国に集中してくる。わが国の統計では、銑鉄を生産する国は四五ヶ国しか確認していない。銑鉄を生産する国は粗鋼生産国の四分の三なのである。だが、ス

第1章 世界の鉄鋼業

第1-3表 世界の鉄鉄生産における
主要国

				1970	1971
ソ			連	85,933	89,300
ア	メ	リ	カ	83,324	74,117
日			本	68,048	72,745
西	ド	イ	ツ	33,627	29,990
中			国	16,500	19,000
フ	ラ	ン	ス	19,128	18,323
イ	ギ	リ	ス	17,672	15,416
ベ	ル	ギ	ー	10,955	10,525
イ	タ	リ	ー	8,354	8,554
チェコ	スロヴァ	キ	ア	7,548	7,961
カ	ナ		ダ	8,282	7,816
ボ	ー	ラ	ンド	6,984	7,175
イ		ン	ド	6,530	6,500
オースト	ラ	リア		6,148	6,128
ス	ペ	イ	ン	4,164	4,830
そ	の		他	48,703	51,120
合			計	431,900	429,500

(注) ①単位:1,000トン

第1-4表 世界の地域別粗鋼見掛消費
費量

				1970	1971
西	ヨ	ー	ロッパ	375	392
ソ連・東	ヨ	ー	ロッパ	416	433
北	ア	メ	リカ	668	611
オ	セ	ア	ニア	337	373
東	南	ア	ジア	51	56
中・南	ア	メ	リカ	67	72
ア	フ	リ	カ	29	36
中		近	東	52	48
合			計	160	163

(注) ①単位:キログラム ②1人当り ③粗鋼生産+鉄鋼の粗鋼換算輸入量-同輸出品

クラップをもちいて製鋼する割合の多い国は鉄鉄生産が比較的少なくなる傾向にあり、第1-3表から
もわかるように四大国・ブロックのシェアは粗鋼の場合とほとんど同じである。
鉄鋼生産の少数国への集中という面は、人口分布からみてもいうことができる。世界の三大生産国で
あるソ連、アメリカ、日本の人口は五五二百万人で全人口三六三二百万人の一五%強にすぎない。人口
最大の中国は七六〇百万人で粗鋼生産は二、三〇〇万トン、一人あたり三〇キログラム弱だし、インド
は五五〇百万人で六五五万トンだから一人当り一〇キログラム強と小さい。一方のソ連、アメリカ、日
本をみるとそれぞれ、五二〇、六〇〇、九三〇キログラムと大きい。これは粗鋼の見掛消費量でみても
同じことがいえる。第1-4表は地域別の消費量であるが、北アメリカ、西ヨーロッパ、オセアニア、

第1-5表 世界の鉄鉱石埋蔵量

		埋蔵量	潜在埋蔵量	合 計
ソ	連	110,500	193,800	304,300 (39)
カナダ・西インド	諸島	36,300	89,400	125,700 (16)
アメリカ・中央アメリカ		8,200	98,100	106,300 (14)
南ア	メ	34,100	58,400	92,500 (12)
ア	ジ	17,300	54,200	71,500 (9)
ヨ	ー	21,300	12,800	34,100 (4)
ア	フ	6,800	24,500	31,300 (4)
オ	セ	16,800	莫大	16,800 (2)
合	計	251,300	531,200	782,500(100)

(注) ①単位:100万トン ②国連, *Survey of World Iron Ore Resources*, 1970による. ③()内は構成比

第1-6表 世界の鉄鉱石生産

		1970	1971
ソ	連	195,506	202,992
ア	メ	89,960	83,020
オーストラリア		51,108	62,000
フ	ラ	57,403	56,421
カ	ナ	48,276	45,700
中	国	43,000	44,000
スウェーデン		31,774	33,338
ブラジル		30,000	32,500
インド		31,368	32,494
リベリア		23,676	25,700
ヴェネズエラ		21,996	22,500
イギリス		12,019	15,224
チリ		11,268	11,425
南ア	連	9,059	10,476
ベ	ル	9,300	9,500
その他		97,587	87,210
合	計	763,300	774,500

(注) 単位:1,000トン

ソ連・東欧と、東南アジア、中南米、アフリカ、中近東の格差はあきらかである。次に鉄鋼生産とその原料である鉄鉱石資源とのバランスをみてみよう。

第1-5表は、一九六七年の時点における世界の鉄鉱石の埋蔵量を示したものである。判明している埋蔵量としてはソ連が最大で全世界の三〇〜四〇%を占めているが、潜在量としては、オーストラリアが莫大であり、まだその全貌がつかめていない。南北アメリカ大陸も多く、全体で全世界の四〇%近いといえる。最近では、オーストラリア、南アメリカ、アフリカなどでの鉄鉱石開発が進み、原産国でも鉄鋼業の拡充がなされつつはあるが、自国内での資源の利用度